

別紙

意見への考え方など

番号	意見	意見への考え方
1	<p>○オリーブ栽培伸び悩みの原因</p> <p>まず挙げられるのは、オリーブ栽培が思ったほど収入につながらないということです。販売先は1社に限られ、品種別で1k 850円、ミックスで1k 450円程度です。しかも、納入期日が限られ、収穫に追われて作業員の確保もままなりません。搾油についても同様のことがいえます。1昨年までは搾油したオリーブ油の販売が禁じられており、自家消費しか出来ませんでした。これでは営農意識が低下するのは明らかです。市がこれからもオリーブ栽培の増加を望むのであれば、小規模栽培者の現金収入を増加させる手立てを考えるべきです。</p>	<p>小規模栽培者の現金収入を増加させる方法は、まず、栽培方法を確立させ、収量の増加を図ることが必要と考えます。そのため、早々に江田島式栽培の確立と栽培方法の普及・定着に努めます。</p> <p>尚、搾油については、令和元年9月に、江田島市オリーブ振興協議会（以下「協議会」という。）が設置した自家消費用搾油機を販売可能となるよう運用を変更し、現在、3者の方が販売を開始しています。</p>
2	<p>○マンパワー不足</p> <p>現在、市のオリーブ担当者は職員1名、地域おこし協力隊1名の2名のみです。繁忙期には若干の民間人に依頼して搾油作業を行っていますが、こんな貧弱な態勢でこれから増大するオリーブ栽培事業に対処することは到底できないと考えます。なぜオリーブ振興室が交流観光課の一隅にあるのか理解できません。少なくとも農林水産課のもとでもう少し人員を増やして対処すべきだと考えます。また、オリーブ担当の地域おこし協力隊を増員すべきではないでしょうか。</p> <p>初年度のオリーブ担当地域おこし協力隊は2名だったのに、収穫量の増大が予想される3年後は当然倍増して然るべきだと考えます。しかも地域おこし協力隊にかかる費用は全額総務省が負担するのにかかわらず、減らすということは全く理解できません。地域おこし協力隊については、ほかにも担当させているようですが、成功しているとは思えません。今後地域おこし協力隊を募集する場合は全員オリーブ担当に特化してもっと多くの人員を募集すべきです。因みに島根県の邑南町は人口1万1千人にもかかわらず、30名の地域おこし協力隊採用しています。少しは他地の成功例を見習うべきではないでしょうか。</p>	<p>江田島市では平成25年から「オリーブ振興室」を設けオリーブ振興を推進しています。その間3名の地域おこし協力隊を採用し、オリーブ栽培技術指導員、オリーブ普及員として先進地 小豆島町で研修を受けてもらいながら着実に人材育成を行っています。こうして育った協力隊の方が卒業後、平成31年度以降も地元に残りしっかりと技術等の普及等に協力いただいています。</p> <p>また、民間企業も着実に技術力をつけてオリーブのすそ野は着実に広がりつつありますので、これからは官民あげて一層の取組みを進めます。なお、市の組織内の人員については、組織全体のバランスを考慮し決定します。</p>

番号	意見	意見への考え方
3	<p>○搾油機の増設について</p> <p>現在、本市には2台の搾油機しかありません。しかも1台は江田島オリブ(株)の所有であり、市民が利用できる搾油機は1台だけです。オリブの搾油は10月中旬から11月上旬にかけて集中する為、現状の収穫量に対処することは出来ません。案の定、昨年の収穫期には搾油の予約を受け付けておきながら、当日の搾油を拒否する事態が生じてしまいました。オリブの収穫量はこれからも増大していくのですから、搾油機の増設は喫緊の課題です。</p>	<p>協議会の搾油機の利用は、令和元年度10月から12月までの3ヶ月間で17日間です。今後は、生産量の増加に対応するために計画的に受付日数を増やすことや民間委託することを検討します。</p> <p>また、10頁の「② 搾油機導入及び加工施設設置推進」の中にもありますが、オリブ収穫量の増加に伴い、参入企業の導入を支援します。</p>
4	<p>○収穫作業員の確保</p> <p>オリブ栽培のネックは収穫作業の困難性にあります。オリブの収穫は手摘みで行わなければならないため、しかも24時間以内に搾油しなければならないため、どの栽培者も収穫作業員の確保に苦労しています。しかも搾油機が少ない為、搾油期日が限定され、その困難性は倍加しています。</p> <p>その為にも搾油機の増設が必要ですが、マンパワーの確保についてもその手立てが必要だと考えます。現在、収穫のボランティアを募集していますが、WWOOFの活用も視野に入れて考えるべきです。</p> <p>その為にも、遊休施設を利用してWWOOFを利用する人たちの拠点を整備する必要があります。</p>	<p>収穫ボランティアや体験イベント等を積極的に取り入れて行きます。また、新規就農研修等により担い手の確保を検討します。</p> <p>なお、WWOOFは、無農薬・無化学肥料を活用した農場での利用となるため、特異な例としての扱いとなるため、生産者自身の取り組みとしてもらいたいと考えます。</p> <p>※WWOOFとは・・・ World Wide Opportunities on Organic Farms「世界に広がる有機農場での機会」の頭文字です。WWOOFは、農業体験と交流の非政府組織です。1971年ロンドンで設立され、その後多くの国に広まっています。</p> <p>ちなみに有機農業とは、無農薬、無化学肥料で作物を栽培する農業です。</p>
5	<p>○オリブ公園の必要性</p> <p>江田島オリブの知名度を上げるためには、オリブ公園の設置は不可欠です。小豆島、牛窓は勿論、最近栽培面積を増やしている熊本県の天草市もオリブ公園を開設して、観光客を増やしています。江田島市は100万都市広島市のバックヤード的存在であり、アクセスも良く、小豆島にとって代わるポテンシャルを有していると思います。小豆島に追いつき、追い越すためにも、オリブ公園の設営を急ぐべきです。</p>	<p>11頁の「④ 深江地区オリブ園やオリブ公園など観光農園化を推進」の中にもありますが、民間活力を活用するなど、オリブを利用した観光農園や食農体験ができる拠点を整備を検討します。</p>